

中野家の執事くん

K—Matsu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学生の身でありながら姉妹たちの執事として働き、いつも騒がしい日常を過ごしてきた。

そこに姉妹たちの父親から1本の電話が掛かってきた。

『彼女たちに家庭教師を雇った。キミには彼のサポートをお願いしたい』

それは騒がしい日常がさらに騒がしくなる序章に過ぎなかった
……!?

目次

E p i s o d e . 4	F i r s t T e s t	19
E p i s o d e . 3	H o m e T e a c h e r	12
E p i s o d e . 2	F i r s t C o n t a c t	6
E p i s o d e . 1	M o r n i n g R o u t i n e	1

Episode 1 Morning Routine

——夢を見ていた。

そこは小さなチャペルの中で、心配されていた天気はどこまでも青く澄み渡った青空が広がっていた。

そしてこの夢の中で、1組の新婚夫婦が誕生しようとしていた。

——さん。あなたは今——さんを妻とし、神の導きによって夫婦になろうとしています。

汝、健やかなるときも病めるときも、喜びのときも悲しみのときも、富めるときも貧しいときも、これを愛し敬い、慰め遣え共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？

——はい、誓います。

——さん。あなたは今——さんを夫とし、神の導きによって夫婦になろうとしています。

汝、健やかなるときも病めるときも、喜びのときも悲しみのときも、富めるときも貧しいときも、これを愛し敬い、慰め遣え共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？

——はい、誓います。

神父の前で今、永遠の愛を誓い合おうとする1組の男女が立っていた。

新郎は不思議な縁によって知り合った高校生の時からの友人。表情は緊張していて固く、心なしか震えているように見える。

一般男性の平均からすると細めな体型で真っ白なタキシードに着せられる感は否めないが、今その務めを果たそうとしている。

新婦は新郎とはまた違った不思議な縁によって知り合った姉のようで妹のようで、そして恩人でもあって親友でもあって……それくらい濃い関係を過ごしてきた。

さらに新婦には4人の姉妹――揃いも揃ってほとんど同じ、所謂五つ子だ――がいるからさらに驚きだ。

そんな新婦は純白のウエディングドレスを纏っていたが、今新郎の手によってベールが解かれた。

ベールによって隠れていた新婦の耳元には彼女たちの母親の忘れ形見だと言われているピアスが暖かな日差しに照らされてキラリ、と存在感を示すように光っていた。

彼女たちの中でも強くあろうとし続ける姉妹たちの精神的支柱である誰かは綺麗だね、と小さく呟く。

姉妹たちや新婦たちと何度も喧嘩してきたけれども姉妹たちの誰よりも家族想いな誰かは目尻に光るものを小さく拭った。

常に内なる自分と戦い続け、姉妹たちの誰よりも芯が強い誰かは優しい眼差しで2人を見つめていた。

俺を含めた姉妹たちと新郎の縁を繋ぎ、お茶目で大食いの気質はあるが彼女たちの誰よりもしっかり者の誰かは小さい拍手で新郎新婦を讃えていた。

「では、誓いの口付けを」

神父に促され、新郎新婦は永遠の愛を誓い合う口付けを行いチャペル内は惜しみ無い拍手で埋め尽くされた。

――1組の夫婦の誕生の瞬間、祝福の鐘は高らかに響き渡っていた。

不意に目を開けた。

そこに永遠の愛を誓い合う新郎新婦の姿も埋め尽くされた拍手の音はなく、閉め切られたカーテンから漏れる微かな光が差し込むだけだった。

現実のような夢だったな、と思いつつカーテンを開けて大きく伸びをする。

いつもよりは遅めの起床時間ではあるが、あくまでそれは自分の中での話なので慌てること無く洗面所へ。

洗顔や髪型のセットと言った身仕度をパツと整え、一度自室へ戻り部屋の壁に掛けてある学校指定のYシャツの上に自前で用意した紺色のベストに袖を通す。

今通っている高校は今話題のブラック校則とはほとんど無縁で、最低限の校則を守っていて派手さや奇抜さが目立っていないければお咎めはない。

着替え終えて学校へ行く支度を済ませてから、エレベーターを使って1つ上のフロアへ。

インターホンを押し、中から『開いてるわよー』と返事が聞こえてきたのを確認してから靴を脱いで中へ入る。

「おはよう。二乃」

「おはよう。早速だけでも朝食を作るの手伝ってよ」

朝の挨拶をそこそこに台所では五つ子の料理番で次女の二乃がエプロンを身に付け、フライパンの上に生卵を落とし込んでいた。

「メニューは？」

「目玉焼き。ベーコンは私が焼くからサラダとスープ作ってくれない？」

「分かった」

あらかじめ用意してくれていた野菜をざく切りにしたり千切ったり、プチトマトやブロッコリーを適当なところへ置いていく。

鍋の中の水を沸かしている間にコンソメやスープの具を用意し、食べやすい大きさにカットしていく。

そうこうしているうちに沸騰し始めてきたので、具やコンソメを鍋

の中に入れて味を整えていく。

スープが出来上がったのとほぼ同時に、二乃が作っていた目玉焼きとベーコンが焼き上がった。

お皿に盛り付けテーブルへ配膳していると、残りの4人の姉妹たちが降りてきた。

「おはよう」

「ナナミ、おはよ」

「おっはようございまくすっ！」

「おはようございまくす」

一気に賑やかになりそれぞれが各々のタイミングで席に着き、それと同時に給仕を始める。

これが俺こと学生の身でありながら中野家の執事として働く水瀬みなせ七海ななみのモーニングルーティーンである。

それぞれのタイミングで朝食を食べ、食後のお茶を出してから使い終わった食器をサツと洗い終えてから給仕用のエプロンを外す。

「ところで今日は何時頃来るんだ？」

姉妹たちの転校先は奇遇にも俺が通っている高校。

何でも姉妹たちの父親と学校の理事長とは旧知の仲らしく、いろいろ折り合いをつけて転校してくる運びとなったらしい。

あくまで端的な事後報告として聞かされたからそれ以上の事は知らないんだけど。

「10時半頃で合ってますか？」

「合ってるよ」

「場所は？」

「職員室」

10時半というと……2限目が終わるころか。

「誰が学校案内するのか分からないけど校舎の中で会ったらよろしくな。じゃ、行ってきます」

「「「「いつてらっしやーい」」」」

姉妹たちに見送られ、学校へと向かった。

きつと先生たちの誰かが案内するでしょ。

授業中に案内するから小さく手をあげるくらいしか出来なさそうだな。

と、この時点では他人事のように思っていた。

そう。思っていたのである。

いざ姉妹たちが学校関係者に連れられて見学する時間。

隣には学年主任の先生が立ち、目の前の姉妹たちを見据えながら挨拶をする。

「本日学校案内をさせていただきます旭高校生徒会副会長の水瀬です」

お辞儀をしながら思った。

……どうしてこうなんねん、と。

Episode 2 First Contact

なんでこうなったのか……。

グラウンドや野球場と言った屋外施設を案内しながら少し思い返してみよう。

1限目の授業が終わってすぐに校内放送で呼び出され、何か変な事したつけ……?と思いつながら職員室へ。

そこで展開されたのは……。

『転校してくる娘たちと知り合いらしいね』

←

『じゃあ彼女たちの案内よろしく』

←

『成績優秀なキミなら多少授業出なくても大丈夫でしょ?』

←

『その代わり案内してる間の授業は出席扱いにするよう言っとくからよろしくね』

ってことだった。

うん、やっぱりどう考えてもおかしいと思う。

まあ、『やれ』と言われたらやるしかないけどさ。

外の施設の案内を終え、今度は校舎の中の案内をしようと移動していると姉妹たちが何か品定めをするようにまじまじと俺を見ていた。

「どうした?」

「制服着てるナナミくんはよく見るけどもやっぱり学校で見るとやっぱりいつもより違って見えるね」

「不本意だけど一花の言う通りね」

「言ってる」

うんうん、と四葉と五月も同意するように頷く。

いつもと至って変わらず普段通りなのだが、姉妹たちには少し違って見えているようだ。

「そう?」

「そうですよ。それに七海さん生徒会の副会長さんだったなんて知り

ませんでしたもん」

そうだったか……？と思つたが、確かに生徒会副会長になつたことは姉妹たちに言つてないことを思い出した。

あの時は色々立て込んでみんなピリピリしてたから言いそびれたんだつた。

「副会長つて言つても一般生徒と大して変わらないからなあ……」

「七海くんの事だからつきり全校生徒の顔と名前が一致してるものだとはかり……」

「まだ8割くらいしか一致してないからそれはまだ無理だな」

8割も一致してれば十分過ぎるような、と声が聞こえた気がしたけども気にせずに姉妹たちを引き連れて校舎内へと歩みを進めた。

校舎の中を案内していたが、半分もしないうちに昼休みの時間になつた。

それぞれ食べたい物を厨房の人たちに言つて代金と引き換えに受け取り席に着いていくが、先生や生徒で埋め尽くされた食堂で6人分の座席を確保できる筈がなく4人と2人に分かれざるを得ない状況だ。

話し合いの結果五月と俺、あとの4姉妹に分かれることとなつた。

「おうどんと海老天2つにいか天にかしわ天にさつまいも天。あつ、プリンもお願いします」

「はい」

「牛丼とうどんとサラダ特盛に牛乳にプリン。お会計はこの娘と一緒に」

「はいよ〜」

「……いいんですか？」

「いいよ、これくらい。その代わり4人には内緒な」

五月はありがとうございます、と笑顔で答えた。

これが一花や四葉だとすぐに他の姉妹たちに話してしまい、全員何らかのタイミングで奢らなければならなくなる。

その辺五月は口が堅いので気軽に奢ることが出来る。

「水は？」

「お願いします。私は席取っておきますね」

「ん」

二手に分かれ五月は席の確保に、俺はウォーターサーバーの列に並ぶ。

それほど並んでいなかったため割とすぐに水を汲むことが出来た。

「さて、と……」

どこの席を確保したのか周囲を見渡す。

姉妹たちの制服は明日届くため、まだ転校してくる前の学校の制服のままだ。

一花たち4人はすぐに見つかったのだが、肝心の五月がなかなか見つからない。

あまり遠くには行っていないはず、と目線を奥の方から手前へ移すと五月の姿を見つけた。

どうやら無事に席は確保出来たみたいで、すれ違う先生や生徒たちとぶつからないように歩きながら五月の元へと近付いていく。

そこで五月を探すのに集中して気が付かなかったが、目の前には1人の男子生徒が座っているのに気が付いた。

五月は不機嫌そうな様子を隠さず目の前に座る男子生徒を一瞥し、また男子生徒は五月を意に介さずプリントを見ながら黙々と食事を摂っていた。

「ご飯に味噌汁に……生野菜？」

生野菜が乗っている皿には肉の脂や揚げ物の衣が無く、ホントに生野菜だけが乗っていた。

「こいつ、ホントにこれだけで足りるのか？」

「七海くん！聞いてください！この人が……」

「あんたが勝手に座ってきたんだろ？」

話の腰を折られた上にぶつきらぼうに吐き捨てられ、五月の不機嫌度合いがさらに増してしまった。

「それにあんた生徒会の副会長だろ？他校の女子生徒を連れ込むなん

て何考えてんだ？」

そしてその矛先はこちらにも向いてきた。

「この女子生徒は今度ここに転校してくるんだ」

「ふくん……」

男子生徒は興味ない、と言わんばかりの生返事だけして手に持っていたプリントへ視線を戻した。

五月程ではないが確かにムツとなる気持ちが分かる。

言葉のキャッチボールというか最低限のコミュニケーションもすら放棄しており、いかにも『ガリ勉』の悪いイメージをそのまま体現していた。

「ごちそうさま」

男子生徒は食事を終え、お盆を持って立ち上がった。

「お昼それだけで足りるのですか？」

「ああ、満腹だね。あんたら見ると胸焼けしそうだ」

そしてこの男子生徒は五月に目を向け、とんでもない爆弾を落とすていった。

「特にあんたは頼みすぎだ」

—— 太るぞ、と。

流石に女性相手に無神経な発言に五月は言葉を失い、そして男子生徒の姿が見えなくなったと同時に怒りが頂点に達した。

五月の怒りを収めるため、食後のデザートとして頼んだプリンを献上する羽目になったのは言うまでも無いだろう。

すっかりご機嫌斜めになってしまった五月を宥めつつ学校案内を続けたり、帰りのホームルームで転校生紹介として俺が所属するクラスに三玖が入ってきたり、三玖との関係性を追求されたりとなんやかんやあった後の放課後。

姉妹たちに断りを入れて先に帰ってもらい、生徒会の雑務をしているときだった。

『〜♪』

「…………マジかよ」

テーブルの上に置いていた俺のスマホが鳴り出し、発信主の名前を見てため息を出し、悪態をつかずにはいられなかった。

しばらく出ようか出ないか迷った挙げ句、しぶしぶ電話応対する。

「…………はい」

『水瀬くん。今日は娘たちの案内ご苦労様』

「…………やっぱあんたの差し金だったか」

『学校の先生たちには申し訳ないが、気心や事情を知ってる相手の方が娘たちも警戒しなくても済むだろう?』

「そりやそうだが…………」

双子ですら珍しいのにそれが五つ子なんて案内をするはずだった先生も気を遣うだろうし、ましてやこんな時期に転入。

まさか『どうしてこの時期に転校してきた?』だなんて聞こうもんなら、何が起きるか分かったもんじゃない。

それでも出来ることなら前もって言っただけ欲しかった、というのが正直なところだ。

「それで本題はなんなんだ?まさかそんな話をするために電話してきたんじゃ無いんだろ?」

この人がこんな世間話の類いをするためにいちいち電話してくるような人ではないし、そもそもそんなに暇な訳がない。

『明日から彼女たちに家庭教師を雇うことにしたんだ』

「家庭教師、だと?」

耳を疑った。

「正気か?」

『もちろんさ』

伊達や酔狂を言うような人間ではないことが分かっているからこそ、彼女たちに家庭教師をつけるなんて正気の沙汰とは思えなかった。

『そこでキミには彼のサポートをお願いしたい』

「…………承知した」

『江端經由で家庭教師の身辺調査の報告書をキミの部屋のポストに入

れておいた。夜になったら目を通しておいてくれ』

そう言い残して通話が切れた。

なんというか……。

「大丈夫、なのか……？」

一抹の不安は消えそうになかった。

夜ご飯を食べ終え姉妹たちが各々くつろぎ始めた頃合いを見て、自室へ引き上げてから例の家庭教師の身辺調査の報告書に目を通す。

粗方目を通してから報告書を置き、天井を見上げる。

「家庭教師、あいつかよ……」

そう呟かずにはいられなかった。

一番上のページには『上杉風太郎』という名前と、五月にとんでもない爆弾を落としていった男の顔写真があった。

Episode. 3 Home Teacher

彼女たちが旭高校に初登校する当日の朝。

「ねえ、ナナミくん。この制服どう？」

「んー？……いいんじゃない？似合ってるぞ」

「むっ、なんか適当に褒めたって感じ。そんなんじゃ女の子にモテないぞ〜？」

本当に珍しく一人で起きて制服に着替えてきた一花の小言を聞き流し、朝食で使った食器を洗っていく。

それまでの過程に目を瞑り、同じ学校の生徒になることは本来であれば喜ばしいはずなのだがイマイチそんな気分になりきれなかった。

(家庭教師、ねえ……)

今日から彼女たちに家庭教師がつく。

しかもその相手は五月に因縁を付けてきた男だと来たもんだ。

どこからどう考えても絶対一悶着あるでしょ、と。

考えれば考えるだけ気が重くなっていく。

……朝から五つ子たちに制服の感想を聞かれ続けたからでは決していない。

「……………ふっ!!」

午前中の授業が終わり、座りっぱなしで凝り固まった身体を椅子の背もたれを使って背中を反らすとバキバキバキッ!と背骨が鳴った。

プロの人間じゃない限り間接とかあまり鳴らさない方がいいんだろうけども、鳴らした時の爽快感とか心地よさを味わったら痛みつきになっちゃうんだよな。

一通り背骨を鳴らし終え、お昼を学食にしようか売店で何か買うか悩んでいると隣の席に座っていた三玖が話し掛けてきた。

「ナナミ。お昼は？」

「学食にしようか売店で何か買おうか悩んでる」

「それなら一緒に学食、行こ？」

「おう。いいぞ」

ロッカーの中に入れていた財布を取り出し、制服のズボンのポケットに突っ込んでから廊下に出る。

しばらく三玖と雑談をしながら歩いていると、少し前方に赤毛の身内が歩いていたので少し早足で歩いて追い付く。

「五月。お疲れ様」

「お疲れ様です、七海くん。それに三玖も」

「五月も学食？」

「はい。三玖たちもですか？」

「うん」

目的地が一緒のため、午前中受けた授業とかクラスの雰囲気とか色々話を聞きながら学食へと向かう。

何でも五月が転入したクラスにはあの上杉がいたらしく、さらに席も隣同士らしい。

『あの時ほど自分の運命を呪った時はありません！』と語気強く話す辺り、上杉に対して相当ご立腹の様子だった。

何をどう話したらあの短時間の間にこんななるんだか……。

注文していた品を取りに行っている間にいつの間にか姉妹全員集合となり、それぞれが談笑しあいながら昼メシを食べていると四葉があの話題を切り出してきた。

「そういえば私たちに家庭教師がつくんだって！」

「家庭教師、ねえ……」

真つ先に難色を示したのはやはりというか二乃だった。

そういえば執事として俺が中野家に関わり始めた時も、こんな感じだった。

「ナナミがいれば家庭教師なんていらない」

「私は別にどっちでもいいかな」

「私も一花と同じです」

三玖も二乃と同様に難色を示し、一花と五月はどっちつかずな意見を吐露した。

「正直外部の人間なんて七海だけでお腹一杯よ」

二乃はフンツ、と不機嫌そうに鼻を鳴らした。

そう評価してくれるのはありがたいことなのだが、この言葉を聞いて中野家に関わり始めた時の事が思い出される。

今となってはいい思い出はあるけども。

「……あれ？なにか落ちてる」

それぞれのお膳を持って立ち上がろうとしたら、四葉が床に落ちていた1枚の紙に気付き、スカートの裾を気にしながらしゃがみこんで拾い上げる。

中身を確認した四葉は一瞬だけ驚いたように目を見開いたが、すぐに折り目に沿って折り畳んだ。

「七海さん。お願いがあるんですけど……」

「どうした？」

「持ち主のところ届けたいんですけど、この人の事分かりますか？」
渡された紙を受け取って広げると、100点満点のテストの答案用紙。

落とし主の名前は『上杉 風太郎』の文字が書かれていた。

上杉、か…。

見える範囲にいくればいいのか、と思いながら少し背伸びをして周辺全体を見渡す。

すると、俺たちか座っていた座席の突き当たりのところに手を組みながら座っている上杉を見つけた。

上杉がいる場所と上杉個人に宛てた伝言を伝え、この場を四葉に任せることにした。

……ちゃんと来てくれるといいのだが。

そう思いつつ、一緒に食堂を後にした。

放課後三玖に生徒会の雑務をしてから帰ることを伝え、しばらく書類作業をしているとガラガラとドアが開く音が聞こえた。

一度書類から目を離し、生徒会室に入ってきた人物が待ち人であった上杉であることをこの目でしかと確認する。

「遅かったな。アルバイト申請書は持ってきたか？」

「…ほらよ」

手渡された書類にサツと目を通し、不備がないことを確認してから生徒会の承認欄に判子を押す。

「はい、確かに承認しました。先生たちからもらう判子とかは俺が回って貰つとくよ」

「そうか」

ぶつきらぼうに言い放った彼はそのまま踵を返し、さつさと生徒会室から立ち去ってしまった。

昨日の出来事から薄々は察してはいたが、勉強以外まるで興味がないような感じだ。

果たしてこんなやつに家庭教師なんて務まるのだろうか…。

それぞれ必要な先生たちの承認の判を押してもらい、最後に校長先生に提出してから割と急いで帰宅する。

一度自分の部屋に行つて制服から仕事の服に着替え、姉妹たちの部屋へと向かう。

入口には上杉と一花、四葉の3人が立っていた。

「あつ、ナナミくんおかえり。生徒会のお仕事お疲れさま」

「三玖から遅くなるって聞いてましたけど思ってたよりも早かったですぬ！」

「は？副会長がなんでこいつらの家にいるんだ？」

事情を把握しきれていない上杉は疑いの表情を隠すこと無く、冷たい視線を容赦無く浴びせてくるがそれをサラツと流し、左手を腹部に当てて右手は後ろに回しながら一礼。

「中野家へようこそ、上杉様。私中野家の執事をしております水瀬七海と申します。以後お見知りおきを」

「はっ……………はっっ？」

それ以上のリアクションが無く、どうかしたのかと頭を上げると上杉は口をポカン、と開けてなんとも間抜けな表情になっていた。

目の前で手を振ってみたいりスマホで連続写真を何十枚か連写で撮ってみたいりもしたが何一つ動じなかった。

「こいつフリーズしてやがる……」

「たぶんナナミくんが執事だった事に驚いてるんじゃないかな？」

「あ、あはは……」

上杉は四葉に任せ、夕食の支度をしようとしてキッチンへ行くと二乃が鼻歌混じりにオーブンの中身を見守っていた。

「おかえり。三玖から遅くなるって聞いたけど思ったよりも早かったわね」

「まあな。…クッキーか？」

「そうよ」

オーブンの中を見てみると小麦色の生地が均等に並べられており、仕上がりを見る限りだと焼き上がるまで時間はそんなに時間は掛からないだろう。

「なら邪魔ならん程度に支度しとくよ」

「夕食の準備なら私がやるわよ。その代わりこれ買ってきて欲しいんだけど……」

手渡されたメモを受け取り、サツと目を通す。

それなりの量があるため、徒歩で行くしかなさそうだ。

「頼めるかしら？」

「いいけど少し時間が掛かるけどいいか？」

「じゃあお願いね」

「オレの分も少し残しといてくれよ」

そう言い残し、玄関を出ると同時にスーパーへ向かって走り始めた。

「はあ…。キッツ…。」

気合いを入れて走ったお陰で想定した時間よりも少し早く買い物を終え、荒れた息をエレベーターの中で整える。

頼まれた品の重さが意外とあるため、なかなかハードな買い出しだった。

「ただい…は？」

両手に物を持っているため、使用人としてはどうかと思っただが足でドアを開けると一花と三玖がテーブルの上に置かれたペーパーに頭を悩ませ、その隣にはシャーペン握り座ったままオーバーヒート寸前の四葉。

そして、フローリングに突っ伏したままの上杉の姿があった。

「……二乃？これどういう状況？」

「眠らせたわ」

「眠らせた!？」

サラツとすげえこと言ったな、オイ!？」

荷物をキツチンに置いてから改めて上杉の様子を観察。

規則正しい呼吸に眼球の向きなどから、本当に眠っていることを確認することができた。

テーブルの上にクツキーが乗った大皿や水が中途半端に入ったグラスがあつたため、大方水の中かグラスの縁に睡眠薬を盛つたのだろう。

「二乃」

「なによ」

「こいつにどういう思いがあつて眠らせたかなんて聞くんもりはない。けど…。」

「けど…、なによ?？」

「こいつどうやって家に返すんだ?？」

「……あつ」

ポケットに入れていたスマホを取り出し、電話を掛ける。

「もしもし、江端さん？少し頼みたいことがあります。ちよつとマンシヨンまで来てもらえますか？」

その後、江端さんに事情を説明してから眠りこけている上杉を家まで送り届け、妹ちゃんにも事情を一部分を省いて説明すると布団を用意してもらった。

布団に寝せて何かあったら、という事で連絡先を渡してから上杉家を後にした。

そして二乃にはせめて後先の事を少し考えてからやるように、と釘を刺しておいた。

Episode. 4 First Test

「休日くらいゆっくりさせて欲しいわね……」

「日曜日にあの人と顔を合わせたくありませんでした」

不機嫌な様子を微塵も隠そうとしない二乃と五月。

かくいうオレも2人とは違った理由であまり顔を合わせたくない。

家庭教師を付けてから初めての日曜日。

普段であればそれぞれ有意義と思える時間を過ごしているのだが、早朝に上杉から連絡が入った。

内容としては全員を家に引き留めておいてほしい、というものだった。

一応彼女たちの執事として、今回限りである事とこれからはそういう事は控えてほしい事は伝えさせてもらった。

アポなしで彼女たちの予定を潰させてしまったのだから、これからは姉妹たちの都合を考えてほしい。

そして予定の時刻となり、寸分の狂いもなくやって来た上杉は何故か意気揚々とした様子だった。

「この間の悪行は心優しい俺がギリギリ許すでしょう。そして今日はよく集まってくれた!」

「まあ私たちの家ですし?」

「まだ諦めてなかったんだ……」

「今日友達と遊ぶ予定だったんだけど?」

「お前たちは家庭教師はいらないと言った。だったらそれを証明してくれ」

そう言って持参したクリアファイルから何枚かの紙を取り出し、姉妹たちに渡していく。

テーブルに近付き、何を渡されたのか確認すると問題用紙と解答用紙がそれぞれ1枚ずつ配られていた。

「一応聞くがこれは一体?」

「今からこいつらにはテストをしてもらおう」

「……赤点ラインの人間だけに絞って教える、ってことか?」

「そういう事だ。合格ラインに到達した奴には金輪際近づかないと約束しよう」

上杉の言葉を聞いて姉妹たち……特に五月の目が光った。

「少しはやる気が出たようだな。それでは……始め！」

上杉の合図と共に姉妹たちは一斉にペンを走らせ始める。

効率だけを見ればそれが一番手っ取り早いだろう。

ただ、家庭教師の対象となる人数が5人だから雇用的には少し問題があるけども。

俺も少し目を通したくて上杉から問題用紙と解答用紙を借り、コピーを取らせてもらってから改めて問題に目を通していく。

問題用紙が手書きだったことには少し驚いたが、上杉の努力が滲み出ている味のあるテストだ。

ただ……。

(……出題の教科が偏りすぎじゃないか?)

国・数・英・理・社の5教科が1枚の問題用紙の中に詰め込まれているため、問題が少し偏ってしまうのは仕方ない。

だが、このテストは社会と数学に比重が置かれており、国語に至っては10点分あるかどうか、だ。

せめてこのテストの採点で少しでも彼女たちの本質を理解出来てくれればいいんだがな……。

その後も緊張の糸が張り詰めたりビンクに秒針が進む音だけが響き、時間にしておよそ30分くらい経ったところでテスト終了の音が響いた。

上杉が答案を回収して一枚ずつ一問ずつ採点していく。

最初は仏頂面だったが、赤ペンを走らせるにつれてみるみるうちに冷や汗が流れ、表情もより険しくなっていた。

「採点終わったぞ。お前らすごいな、100点だ」

だが、と前置きしてから答案用紙をテーブルの上に叩きつけるように置かれた。

「5人全員合わせて、な!!!」

叩きつけられたテストの点数を眺める。

えっと…、最高点は三玖の30点で最低点は四葉の8点。

あとは一花が25点、二乃が17点、五月が20点だった。

歴史と数学が多めだったから三玖と一花が比較的点数が取れており、逆に国語の問題がほとんどなかった四葉は点数を稼ぐことが出来なかった。

それに乗り気が全くなかったテストだし、これくらいが妥当なところでしょ。

「そんな…どうして…!?勉強したはずなのにっ…!」

五月だけはまた別の事情が絡んでいるのだが、合格ラインにもすら届かなかったことに呆然と、そして悔しそうに呟いた。

「お前ら…!」

ワナワナと身体を震わせる上杉が何かを言うよりも早く、姉妹たちはそれぞれ自分の部屋に逃げ去っていく。

「全員赤点候補かよっ!!!」

「まあ、そういうことだ」

「お前!知ってたんなら早く教えろよ!!」

「まあまあ。でも…」

怒りで握みかかりそうなところを寸前で躲し、姉妹たちの答案用紙を上杉に返却する。

それに仕えている側として、彼女たちがバカバカ言われ続けるのは正直いい気はしないのでフォローを入れさせてもらおうかな。

「テストの答案用紙をよく見てみる」

「はあ?これを見たってアイツらの馬鹿加減が分かるだけだ…ろ…!?!」

鼻で笑うかのような状態だった上杉だったが、5枚並べた状態でテストの答案を目を見開いて食い入るように見始めた。

ようやくと気がついたか。

「偶然か、これは!?」

「偶然なんかじゃあ、ねえよ」

否定したくなる気持ちは分からなくはないが、残念ながらこれは偶然でもなんでもない。

「彼女たちはな……」

—— 自分の得意科目なら点数が取れるんだよ。

『そうか。彼と接触したか』

夕食後、少し先にお暇して自分の部屋に戻り彼女たちの父親に報告の電話を行った。

『それで、彼はどうだい？』

「二乃と五月には相当毛嫌いされてるし、今のところ奴の味方は四葉だけだ」

『一花くんと三玖くんは彼の味方じゃないのかい？』

「一花は中立。三玖は……どうなんだろうな」

中立と言うわけでもなければ敵対視してるわけでもない。

他の4人とは違い、三玖だけに関しては今日だけでは判断しきれなかった。

曖昧な返事に興味を無くしたのかまあいい、と返答が来た。

『じゃあ、僕は仕事が忙しいから切るよ。家庭教師をした事は逐一報告するように』

そう言ったきり、通話が切れた。

ケータイを机の上に置き、深くため息を吐きながら思う。

中間管理職つてのはこんなにも苦勞するもんなんだな、と。

どつと疲れが来たため、部屋着に着替えてベッドにダイブする。

風呂は明日の朝イチで入り、明日以降の事は明日考えることとにしてそのまま目を閉じ夢の世界へと飛び込んだ。